

上信地域の絹産業発展に和田英が果たした役割

おエイちゃんプロジェクト（新島学園短期大学）

市橋琴乃羽・齋藤菜々美・中里 綾花・吉野 萌花・
宮澤 舞・金井 佑奈・竹内 怜奈（以上1年）

富岡市のゆるキャラであるお富ちゃんのモデルとなった和田英という人物。生まれは長野県だが、群馬県の富岡製糸場へ出稼ぎに来ていた理由とは。そして、帰った際に何を持ち帰ったのか。彼女の活躍により発展した絹産業を深掘りし、当時の女性の活躍にスポットライトを当てる。そして、彼女の活躍により、何を成しえたのかを解明する。

1. 研究の内容

はじめに、富岡市のゆるキャラであるお富ちゃんとはかつて、富岡製糸場の模範的な工女であった和田英をモデルに生成されたことから、「おエイちゃん」と名付けられた。和田英は長野出身の女性で松代藩横田数馬の次女である。そんな彼女がなぜ群馬の富岡製糸場に出稼ぎへ来ていたのか。そして、彼女は長野へ何を持ち帰り、どのような活躍を見せたのか。「富岡シルク」と和田英の貢献に迫る。

2. 調査の方法

本研究における調査の方法は以下の通りである。

- ・和田英が執筆した日記である「富岡日記」を読み解き、彼女の私生活から秘められた思いまで幅広く考察する。また富岡製糸場へ赴くことにより当時の状況を収集する。
- ・和田英の生まれ故郷、そして培った技術を持ち帰った地である長野へ赴き、絹産業発展について探る。

3. お富ちゃんのモデル 和田英とは

まず、富岡市のゆるキャラである「お富ちゃん」を紹介する。⁽¹⁾

【プロフィール】

氏名	お富ちゃん
生年月日	10月3日（10（と）と3（み））
性別	女の子
年齢	ずっと14歳（富岡製糸場創業140年（平成24年）に誕生）
住所	富岡市富岡1番地1（富岡製糸場）
仕事	とみおかをもっと元気にする事 とみおかの魅力を全国にPRすること
性格	やさしく おしとやか
願い	とみおかがもっと豊かになることをいつも願っている
趣味・特技	座繰り・お散歩
好きな食べ物	こしね汁（コンニャク・シイタケ・ネギの入った郷土料理）・おきりこみ・どどめ（桑の実）

工女のような姿をしたお富ちゃんは、和田英という工女をモデルに作られたといわれている。
では、和田英とはいったい誰なのか。彼女の素性を調べる。

和田英

「1857年、信州松代に松代藩士の娘として生まれる。1873年4月、15歳で同郷の女子15名とともに群馬県富岡の官営富岡製糸場の伝習工女となる。翌1874年7月に退場し、8月に長野県西條村に開設された日本初の民営器械製糸場（後の六工社）の技術教師となり、その後、県営長野県製糸場の製糸教授になった。1880年に同郷の軍人和田盛治と結婚し家庭に入る。」と富岡日記に記載されている。⁽²⁾

4. 富岡製糸場とは

江戸時代末期、鎖国政策を変えた日本は外国と貿易を始めた。その当時の最大の輸出品は生糸だった。しかし、生糸の輸出が急増し、需要が高まった結果、質の悪い生糸が大量につくられる粗製濫造問題が発生したのだ。そこで、諸外国から生糸の品質改善の要求や外国資本による製糸工場の建設の要望が出された。

明治維新後、富国強兵を目指した政府は外貨獲得のため、生糸の品質改善、生産工場を急いだ。しかし当時の民間資本による工場建設は困難な状況であったため、洋式の繰糸器機を備えた官営の模範工場をつくることを決めたのである。

ではなぜ、模範工場を富岡に作ることを決めたのか。理由は下記の通りである。

富岡製糸場の設立企画を担当した政府の役人が武蔵、上野、信濃の地域を調査し、次の理由から上野の富岡に決定した。

- ・富岡付近は養蚕が盛んで、生糸の原料である良質な繭が確保できる
- ・工場設立に必要な広い土地が用意できる
- ・製糸に必要な水が既存の用水を使って確保できる
- ・蒸気機関の燃料である石炭が近くの高崎、吉井で採れる
- ・外国人指導の工場建設に対して地元の人たちの同意が得られた

こうして、富岡製糸場では最新鋭の製糸機械を導入したことで、生糸の大量生産を可能にしたのだ。富岡製糸場は日本初の本格的な製糸場であり、ここでの絹産業は明治時代からの日本の近代化に欠かせない存在となる。日本だけでなく世界の絹産業発展にも貢献し、世界トップクラスの機械製糸工場にまでなった。

また、余談だが、富岡製糸場は2014年にユネスコの世界文化遺産に登録された。世界最大規模や抜群の生産能力を誇った工場がほぼ完全な形で残っていることが認められ、絹産業を構成するほかの3カ所とあわせて登録されたのだ。また、世界の絹産業の技術革新にも貢献したことが理由としてあげられる。繰業停止後も「売らない、貸さない、壊さない」の3原則が守られたため、保存状態が良かったと考えられる。

5. 富岡製糸場の和田英の活躍

富岡製糸場では糸をとる実力により階級が決まっていた。一番は、一等工女と呼ばれている。多くの工女が一等工女を目指しているが、和田英は人一倍努力家で、見事一等工女になることが出来た。国家的使命を背負って富岡入りした英は、一等工女としても頭角を現す。また、英は郷里松代に製糸場を建設することが決まっていたため、帰国したら見本にならなければならないという使命があった。一等工女は平均して一日に五升とった。和田英は無駄話やトイレに行く時間をも惜しんで、一心不乱にとり続けることによって八升とれるようになった。富岡で1年4カ月の修行を終え、明治4年富岡を後にする。そこから松代に帰り、本

格的な富国策が展開される。

絹産業

- ・養蚕 桑を育て、蚕を飼い、繭を生産する
- ↓
- ・製糸 繭から生糸をつくる
- ↓
- ・織物 生糸を染め、織り、反物等に仕上げる

富岡製糸場では、絹産業の一部である製糸を行っていた。

6. 養蚕・製糸の歴史

絹の生産は、約5000年前に中国で始まり、世界各地に広まった。

日本には約2000年前に伝わり、江戸時代中頃、生糸の生産量が急増した。

特に群馬県では養蚕、製糸業が盛んになり、技術も発展した。桐生や伊勢崎では、絹織物業も盛んになった。

1859年、外国との貿易が始まると、生糸は日本最大の輸出品になった。

政府は1872年、フランスの最新式の製糸機械を備えた富岡製糸場をつくり、品質の良い生糸の作り方の見本を示した。その後、日本の養蚕、製糸技術は世界で最も進んだものとなった。

7. 長野に戻った和田英の活躍

「明治17年（1884）に、松代西条村の日本最初の民間蒸気製糸場、西条村製糸場（後の六工社）の教婦としてその創業に尽力した。後年、明治41年（1908）から大正2年（1913）にかけて、富岡製糸場の生活や六工社創立当時を追想し、『富岡日記』を執筆。当時の新しい女性の生き方が映し出された貴重な記録となっている。明治44年（1911）には『吾が母の躰』を著した。生家である横田家は、敷地と建物のほぼ全てが現存し、松代藩中級武士の生活の様子を偲ぶことができるとして、重要文化財に指定され、一般公開されている。」⁽³⁾

8. 富岡シルク

現在、富岡シルクは見た目の美しさやしなやかな肌触りが特徴的だが、現在では衣類だけでなく石鹸や食品、アクセサリとしても流通している。そんな富岡シルクの原点である工場の歴史を振り返る。

富岡製糸場は怒涛の明治時代に栄えた日本で最初の官営模範工場だ。フランスの技術を導入した工場では全国から集められた伝習工女たちが働いていた。赤レンガの栄えある外観は後に流行語として日本に定着したハイカラといった言葉が似合うだろう。建設にはフランス人の指導者であるポール・ブリュナの計画書が用いられ、1871年から始まり、1872年の10月4日に操業が開始された。そして、民間に払い下げられた後の1987年まで操業を続けた。2014年6月21日には富岡製糸場と絹産業遺産群として世界遺産に登録された。

そんな富岡製糸場だが、操業されていた時から富岡シルクというブランドがある。世界的に有名になったブランドだが、なぜ富岡シルクが有名になったのか。世界にも視野を広げて調べていく。

明治時代初期、生糸は日本の主な輸出品のひとつだった。

世界では産業革命が終わり、ヨーロッパでは生糸のニーズが増えていた。しかし、蚕の病気が流行したた



め生糸の生産が追いつかなくなってしまう、輸入品に頼ることになったのだ。

結果、日本では輸出が急増した。しかし初めは【富岡シルク】というブランド名がつくような生糸ではなく、質の悪い粗悪品が大量に出回ることになってしまった。

明治維新後、政府は生糸の輸出を重要だと考え国策として製糸産業の育成を行った。その代表的な例が富岡製糸場だ。

富岡製糸場は高品質な生糸の大量生産や蚕種の統一などを行い、世界的にも良質と謳われ、最高級品と認められた。

しかし、生糸価格の低迷や、政府の減産対策によって繭が不足し、さらには化学繊維の普及によってシルク需要の低迷や安価な輸入品の増加などによって製糸業は衰退した。

現在は富岡市が富岡製糸場を所有し保存修理や整備活用等の管理を行っている。

富岡製糸場の歴史や文化財としての価値を後世にも残すことで意義を理解してもらうことが目的となっている。

今回、富岡シルクを調べるにあたって背景には世界の状況や日本の政策があり、日本の高い技術が相まってブランド化したものと分かった。衰退した今でも歴史的価値を残そうと保護され、富岡シルクは受け継がれている。当時よりもバリエーションの豊かになった富岡シルクはこれからも後世へと受け継がれていくだろう。

9. まとめ

和田英の出自や環境、そして当時の時代背景について調べていくうちに、和田英を取り巻く周囲が鮮明になった。彼女は決してか弱い女性ではなく、自身の意志を貫き、信念を曲げない強い女性だ。そして、周りの女性もそんな彼女の姿をみて、強く生きることが出来たのだろう。男尊女卑の時代に、自ら奉仕に名乗りを上げ周りをも巻き込む力は、彼女の魅力といえる。富岡市のゆるキャラのモデルとして選ばれたことは、もはや必然だったのではないだろうか。

引用

(1) お富ちゃんのプロフィール

(URL : <https://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/10000000002374/index.html>) 最終閲覧日 : 2022年1月30日

(2) 『富岡日記』(筑摩書房・2014年6月10日)

(3) 長野に戻った和田英の活躍

(URL : <https://www.nagano-citypromotion.com/learning/person.html>) 最終閲覧日 : 2022年1月30日)

参考

・富岡シルク

(URL : http://www.tomioka-silk.jp/tomioka-silk/bland/contents_type=109) 最終閲覧日 : 2022年1月30日

・『富岡日記』(筑摩書房・2014年6月10日)